東亞同文書院中國調查手稿叢刊

51

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

東亞同文書院中國調查手稿叢刊

51

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

第五一冊目録

昭和九年（一九三四）旅行日誌（第三十一期生）

堀本泰造　美和映二郎※　第八巻……一
佐治好郎　加藤誠一　柴崎勝太郎　第九巻……九五
橋迫實　清田武　第十巻……一一三
由井文人　永谷仁一　雨宮芳夫　第十一巻……一三三
爲藤陽次郎　谷彌七　第十二巻……一六七
勝守仙次　内田義雄　第十三巻……一九七
松井成德　小松守司　第十四巻……二一三
德野外志男　津田一男　第十五巻……二四三
下村明信　中山昌生　稲富正男　第十六巻……二六三
黒田正明　磯川武夫　第十七巻……二八五
河原畑一美　羽立實夫　第十八巻……三一五
辻武雄　淺野德太郎　富岡康　第十九巻……三三一

森岡昌利　吉田幸一　第二十卷……三五一
小森藤雄　中川義信　第二十一卷……四〇五
染矢春雄　萩野康治　第二十二卷……四六五
宮内信武　藤本俊策　第二十三卷……四七七
奥田重信　白石博　第二十五卷……四九五
三浦計太郎　中井川信雄　重松保德　第二十六卷……五四九

昭和十年(一九三五)旅行日誌(第三十二期生)

本多實　佐藤隆保　雄城要　第一卷……五五七
田原竹市　下柳田英造　第二卷……五六七
芝寛　角田次郎　岡秀雄　第三卷……五九七
福田克美　第四卷……六一七
服部文彦　第四卷……六三五
久保田重男　雨宮治良　第五卷……六五一
柴田浩嗣　馬場三郎　渡邊次郎　第六卷……六六七
植原了　中垣晉治　第七卷……六八七
黑江道夫　栗坂健一　第八卷……六九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和九年度

南支台湾旅行日誌

第三十一期生

堀本泰造

美和映二郎

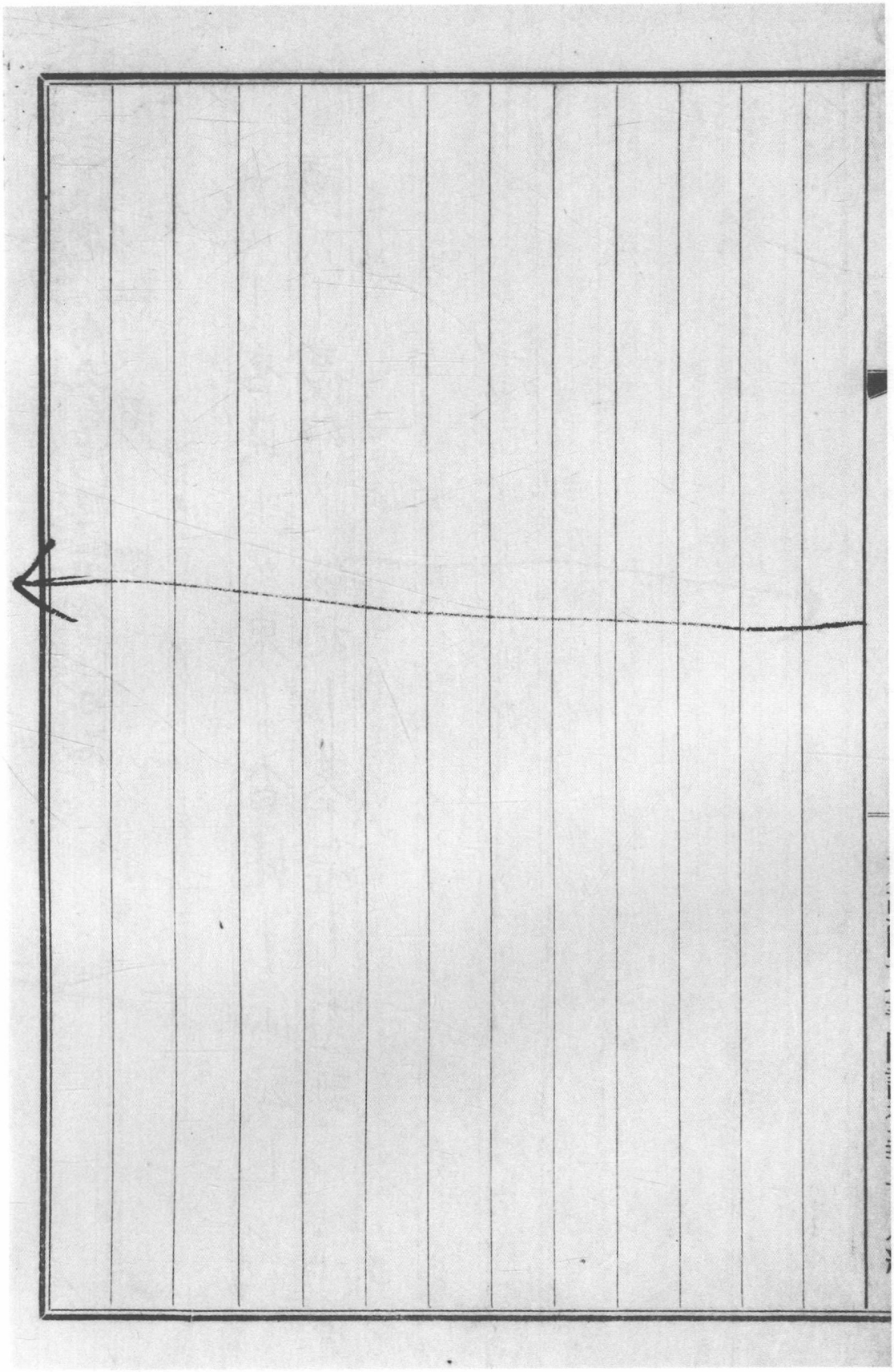
東亞同文書院調査報告用紙

昭和九年度第三十一期生第二十八回調査報告書
第八巻　南支台湾遊歴班旅行日誌

経過地

上海―香港―広東―香港―汕頭―
厦門―高雄―台北―基隆―門司

東亞同文書院調査報告用紙



東亞同文書院

昭和四年　月　日

支隊を承り多くの学友の拍手に送られて校門出発、一行僅かに二人、いさゝか淋しさを感じたるも未知の地に向ふ憧憬と希望とが我々を存外愉快にして呉れた。白山丸の三等船艙に揺すぶられて先づ華かな大旅行気分を目荼苦荼に紛砕された。鼻をつく豚小屋の様な臭気四中に薄明りに照されて囚人の様に蠢く苦力連と日本のシンガポール行き出嫁ぎ連中とが今日から我々一行の仲間である。先づ巣を造ってからと思ったが、どのベッドも皆汚染と埃にまみれてゐるので、ボーイにトランクを托しベットの用意を頼んで早々に船を飛び出した。この船も若かりし頃は多くの船客からもてはやされたものだらうが既にこの老齢では女の古手と同様見る影もない。最後の上海を享楽したくなったのもあながち無理もないと思ふ。

東亞同文書院調査報告用紙

六月五日　火

午前六時頃大毎の緒方氏乗船、これで一行の顔ぶれが揃った。監獄の様な船艙を抜け出して甲板に出て見ると女子オリンピック選手一行が山本博士を中心に見送りの女学生、体協の連中と相対してやんやと騒いでゐる。何と云つてもこの日の主役者は南部忠平選手である。スポーツマン独特の朗かさで「忠さんがんばれ」と大きな日章旗を振り廻しながら盛に見送りの連中を喜ばしてゐる。誰一人見送つて呉れる人もない我々もお蔭で朗かになつて出帆までこの光景を眺めてゐた。まるで自分達が今上海を出発して旅立つ事も忘れて。出帆後間もなく埠に帰つて三人纜を並べて晝寝。夕方起き出て見ると水の色が大分青くなつてゐた。船は舟山列島を逢ふて一路南へ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

六月六日　水

船の旅は時として未知の人でも永年の知己の如く親しくしてくれるものである。遊子の淋しさが浮世の塵埃の皮を一皮剥がすのであらう。私も厚顔とは思つたが二等のデッキで同船の永岡九段に剣を通じる機会を狙つてゐた。折よく散歩に出られたので挨拶して高専柔道に対する御意見を叩いたものである。併しそれは現代の講道館派一般の主張と同様私を失望させたに過ぎなかつた。

六月七日　木

女子オリンピックの連中は毎日朝晩二回のオーミング、アップの暇々にデッキで朗かに東京音頭、櫻音頭等を踊つて騒いでゐる。穏かな航海である。船は一路南へ。

六月八日　金

朝七時、猛烈な驟雨に見舞はれてゐる香港に着いた。ボーイの話に依ると一日に一度は必ずこの驟雨の洗礼を受けるのだといふ事である。吾妻館で旅装を解き畳の上に長々と寝転んでほっとした。午後岩井商務領事の紹介状を持って東洋棉花の田中支店長を訪問「支那関税率と関税収入」に対する所意見を承った。氏曰く「支那といふ国は関税率を上げれば上げる程、関税収入が減少して行く国である」と。これは統計の上にもはっきり表れてゐるが要するに密輸入の取締りをこゝ広東政府に於て礼期し得ない事を物語るものである。約一時間ばかり色々対支貿易に関する所意見を拝聴し、領事館に行く心算で辞去せんとした所、「ピークのドライブがまだだったら所案内するとの事だったので所好意に甘へて宮川氏の所案内で出掛けた。驟雨後の水滴が樹々の枝で光る中を美しいアスファルトがうねくと敷かれてゐる。

対岸の九龍がぼんやりと霞んで油を流した様な香港港に三角状に突出してゐる。平和な夢の國の様な風景である。空氣は濁る度毎に驟雨に洗ひ清められるのだらう。からっとして氣持よい程澄んでゐる。途中レパルスベイ、ホテル（外人海水浴所ある）で茶を飲駐車になり再び九折坂を縫ふて頂上のピークホテル前で自動車を捨て頂上を一周する事にした。所が途中まで来た所で急に一滴二滴大粒の雨が顔に当ったと思ふ間もなくさっと吹く一陣の風と共に再び驟雨の襲来である。大急ぎで引返したが漸くケーブルカーの終点まで辿り着いたときは既にぽつぽつ降り出んでゐた。早々に急傾斜のケーブルカーに投じて帰途につき宮川氏に礼を述べて宿に帰った。

大毎の諸方氏は昨日から大毎香港特派員足利氏の宅に行って居りましたが雲南に帰る日本人夫婦があるので一所に雲南入りをして見たいと言ふ事を電話で言って来られた。夜八時頃僕達の宿に来られて

薬品其の他を御分ち申上げ御別れした。一行は再び二人になつた。

六月九日、土、

同窓会支部幹事平田氏に御電話した所御病気中との事だつたので總領事館の奥田先輩を訪ふ事にした。氏から調査に関する要領を種々承り広九鉄道問題其の他の資料を見せて戴いた。芦野領事代理に紹介して戴き約二十分ばかり御高説を拝聴して辞去。日本郵船に津秋先輩を訪ひ共に淘々酒家にて先輩一同の御招待下さる午餐会に赴く。書陵を中心とした今昔物語で大に話がはずんだ。やつぱり先輩はよいものである。午後三井洋行の支配人廣岡氏を訪問。香港を中心とする貿易について御話を承つた。夕食後夜の香港を漫歩した。

六月十日、日、

八時香港出発、九龍より二等車の客となり広東に向ふ。

香港は言論自由の都会で各新聞が自由に広東政府の批判を下してゐるに反し広東は極度に言論を圧迫してゐるといふ事は昨日奥田先輩より聞いてゐたが広東に近づいた頃数人の憲兵が車中闖入して各乗客から新聞紙を没収し始めたのには驚いた。僕達もお蔭で数種の新聞を没収された。言論の自由を誇る新聞を没収する事は一寸想像出来ない事だった。広東政府の圧迫振りが想像される。これは後の話だが広東で発行される新聞を手にした時、我々は成程と點頭かされた。その内容は広東政府の施政状態の広告か何かの様に事の抜けたもので香港の新聞から受ける感事は何処にも見当らない。併し考へて見ればこんな圧迫こそ他の國で行っても効果はないからこんな巧妙な圧迫か平然で行へる訳に支那らしさがあって面白い様に思った。広東の停車場につき道が判らぬので一番奮発して自動車を飛ばして沙面に向った。沙面は猫の額程の大きさなの

で目的の都市へはすぐ見当つた。日本に十六年居たといふ日本語の上手な女中が親切に世話をして呉れる。満鉄の嘱託澁谷氏を訪ねたが香港に行かれたとの事で商工省の商務官遠藤氏を尋ねる心算だつた所十度先方で我々の到着を知つたと云つて尋ねて下さつた。早速氏独特の奇抜な対支観が始まつた。氏曰く「漢民族は追はれた黄河流域の先住民族こそは我々日本人の祖先である。孔子も諸葛亮も日本人だ。支那は関東州を支那に返せと云ふ前に日本は山東省を返すべきだ」と氏は人種学、古典等より これを説明し得るが或部分が皇室に対し奉り不敬に当るので敢て大声では云はないのだと云つて結ばれた。

六月十日、月、

總領事館に陳、福井、下川諸先輩を訪ね挨拶して下川先輩に連れられて日清汽船の梅津先輩、台湾銀行の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com